

汚染水の処理で揺れる浪江町

タブーに近づけば、いけないうちではないか？

常磐の魚はおいしいと定評があった。

その評判を台無しにしたのが、原発事故による実害と、風評被害だ。

十年かけて復活した浪江町の漁業。そこに汚染水処理の問題が浮上した。

政策に翻弄され、揺れ動く地元の人たち――。

フリージャーナリスト

鈴木博喜

●すずき・ひろき 1972年、神奈川県生まれ。地方紙記者を経て、2011年から『民の声新聞』を発行。福島県中通りに通いながら、原発事故に伴う被曝問題を中心に避難者訴訟や避難者支援問題などの取材を続け執筆している。

取材に応じるな

暖かい陽光の下、来るべき二〇二一年に向けて、請戸の海の男たちが漁船に正月飾りを取り付けていた。

港では例年、海の安全と豊漁を祈願する出初式が正月二日に行われ、たくさんの大漁旗をなびかせた漁船で彩られる。震災・原発事故から七年が経った二〇一八年に復活したが、「今年はコロナ禍で大幅に縮小だよ。まあ、こういう状況だからしょうがないね」と漁

師は苦笑した。

しかし漁師が饒舌だったのはここまで。汚染水の海洋放出について切り出すと、途端に表情は曇り、口数が減った。

「原発？ 汚染水？ ああ、そういうことには答えられないんだよ。取材に応じるなって組合から釘を刺されてさ。そういうことだからわりいな、ノーコメントってことで」

ある漁師は、「名前を出さなくたって、誰がしゃべったかすぐに特定されちゃう。オレがさつき話したこ

とは絶対に書かないでくれよ。請戸の海で飯が食えなくなっちゃうからさ」と語気を強めた。

別の漁師は、「汚染水の海洋放出に賛成している漁師なんていねえよ。みんな腹の中では反対してる。そんなことをされたら、今までやってきたことが全部台無しになっちゃうからな」と口にしたところで、「これ以上は駄目。上に怒られちゃう」と慌てて船に戻った。筆者は、「反対ならば、もっと反対や怒りの声をあげればいいのに」とぶつけてみたが、この漁師はチラッとこちらを見て表情を歪めるばかりだった。

汚染水を海に流されたら真っ先に影響を受けるのが漁師だ。腹の中は国や東電への怒りや不信感で渦巻いているが、ここでは汚染水の話はタブー。本音を口にすれば怒られる。それが請戸漁港だった。

そもそも「汚染水」とは何だろうか（経産省は「ALP S処理水」と呼んでいる）。

昨年九月、陸上保管を求めている市民団体「これ以上海を汚すな市民会議」が、経産省資源エネルギー庁廃炉・汚染水対策官の木野正登参事官をいわき市に招いて意見交換会を行った。その際、木野参事官が用意

